

退任記念講演

駒沢大学と私

酒井得元

私は昭和二十四年から、この駒沢大学に御厄介になつておられます。それで、ちょうど三十八年間、御厄介になつたことになります。今年、満七十五歳になりましたから、ちょうど私の人生の半分をこの駒沢大学で送らせて頂いたことになります。

本日、この会を催して下さいましたことは、恐らく長い間この駒沢大学で、御厄介になつたんだから御礼を申上げなければならぬので、わざわざこの機会を作つてやろうというところからこの会をお開き下さつたことと思いそのご厚情に深く感謝いたします。

今から考えてみると、私にとっては、駒沢大学は私の一生であつたといつてもいいんじやないかと思います。大体、人間といふものは道楽者なのです。もしこの自分の道楽を全うさせて頂くことが出来たら、その人間は最高の幸福者と言つてよいでしょう。然してそれを完全に全うさせても

らうということ、なかなか出来るもんじやありません。ところが、大学ってところはそれをさせて下さる大変結構なところでございまして、私はつくづく自分は世の中で一番仕合せものだつたと思ひます。こんな意味から私はつくづく仕合せな人間であったことは大学の教員であったからこそと思います。特に駒沢大学は定年が長いのですから。特に有難く思います。実に私は駒沢大学に非常に感謝しております。まず、それにつきまして、私の今日までの歩みを御参考にまでお話してみたいと思います。

私は実はどうして禅を志したかということからお話を進めてみたいと思います。静岡県立の中学校に入りました時に、私は寺で育ちましたが、禅宗寺で育つていたことは全く知りませんでした。まして、この世の中には、坐禅ということがあることなどは知らなかつたのです。私の育つたところは静岡県の西の方で遠州の真中あたりでした。あのへんのお寺さ

ん方がその当時坐禅の話をしていたことを聞いたことはありませんでした。だから私も小さいうちから、そのような状態の中のお寺さんの世界で育つたものですから、坐禅のざの字も聞いたことはありませんでした。

それが中学校に入つてから、中学校の校長が、昔の東京高等師範学校の出身で、その人は、学生時代に鎌倉の建長寺か円覚寺かあのへんの寺で釈宗演という人について参禅して、いつも熱心に通っていたそうです。それで修身の時間に、昔は修身といいますと校長が教頭かしかやらないんです。そのとき別に修身の教材といったものはありませんでした。いつも教頭や校長が自分が経験した坐禅の話しかしませんでした。それで坐禅というものが、どういうものであるかということを知ったわけですよ。それから私が一番印象的だったのは、正月の元日の学校での儀式、校長が六祖慧能禅師の話をしてくれました。それで慧能という人が禅宗にあるということをはじめて知りました。そうして、寺に帰つて聞いたら、そのようなことは和尚さん達はご存知ないようでした。

それで、この辺には禅宗の寺があるのか聞いたらうちには禅宗だよと言うので、私は曹洞宗じやないかというと、曹洞宗というのが禅宗だというのです。その時なんだか変だなあと思いました。とにかく私はその時にはじめて禅宗ということを知りましたが、じゃあ、校長先生の話では坐禅を

しているときには警策を使うことだが、警策というものはあるのかと聞いたら、警策はあるという。然し私はそれまでそのようなものは聞いたことも見たこともありませんでした。まあ、そんなことでした。私が禅というものに興味を持ちはじめたというよりは、関心を持ちはじめたのがそういうような次第がありました。その時は、私はお坊さんになることが一番嫌いだった。なぜかといいますと、静岡県のあるあたりでは、その当時、坊さんの恰好をしていると皆なか坊主坊主といって馬鹿にするものですから、私はそれで劣等感を感じていました。中学校入りましたときに、友達が「おまえ、お寺の小僧だつてな」と言ってそれから馬鹿にされました、それから坊さんであることが嫌になってしまったのです。あの時代には一般の坊さん達も坊さんの格好することをさせていたようでした。然し、いつの間にか、どういう事情であつたか知りませんが私の寺に『大乗禪』という雑誌が来るようになっていました。この『大乗禪』という雑誌をはじめて知ったのは、私が中学の四年生のときだったと思します。この雑誌は、坐禅のことばかりが書いてあるのでした。この雑誌は現在もありますがその当時は原田祖岳という人が中心になつて、飯田檜隱という人がやつておつたものです。坐禅は悟らなければならんということばかりが書いてあつた。それでは悟りはどういうふうにして修行したらよいのか、またどうし

ても我々はなんとかして悟らなければならぬというようには思ひ、そして坐禅に魅力を感じました。かくて坐禅したならば、どうしても悟らなければならぬものだと感じました。それからこの大乗禪誌によつて一生懸命、坐禅を毎日、一人でこつそりとやつていきました。然しいつまでたつても、悟りは開けません、まあとにかく坐禅をするだけはしておけど、こういうことでやつておりました。中学を卒業しまして、その当時は他へ行こうと思つていきましたので駒沢大学へ入るつもりは全くありませんでした。ところがそれが反対されて駒沢大学に入るようになりました。したがつて希望して入つたわけじやありませんでした。したがつて、しようがなくて入つたと言つたところでした。入試で面接のときに、昔は入学試験には面接がありました。その時には学長が直接やつっていました。それが忽滑谷快天先生だったのです。その両脇には、若い先生がいたんです。それが誰であつたかさっぱり忘れてしまいました。そのときに、片方の先生が、君が一番尊敬している人は誰だと聞かれました。別に尊敬している人はありませんでしたが、答えなきやならんと思いました。その当時、私は宗門の人、誰も知りませんでした。管長さんが誰であろうと、なんとか老師であろうが全然そのようなことは考えてみたこともありませんでした。ただそのとき頭に残つておつたのが、原田祖岳という名前だけだったのです。だか

ら私は、すぐ「原田祖岳さん」とこう答えました。それから帰つてきてね、おまえ、いまなんと答えたというから、原田祖岳といつたら、それではおまえだめだぜーといわれました。どうしてかと聞きましたら、いまなあ原田祖岳さんとそれから忽滑谷快天さんはこんなふうにものすごいんだ。敵同士だよ、そんなこといつたら、おまえ落第だぞ。それで私はあきらめました。あきらめて、しかたがないから帰つてきましたが、その後になつて合格通知が来ました。それで変だなあとは一応思いましたが、入試とそれとは関係がなかつたらしいです。駒沢大学に入りましたし、仏教を学ぶことになつたわけです。そうして学生生活に入つた私にとって一番魅力があつたのはね、岩波から出しておりました『思想』という雑誌です。あの『思想』という雑誌の中には、西田幾多郎という人の論文が毎号出ていたのです。この論文に魅力を感じて、大の愛読者になつてしまつたのです。それはどういうわけかわかりませんがいつの間にかそうなつてしまつたのです。それで毎号の論文を、一生懸命読んでいました。それからその意味を一日中それを考えていました。ある時は天井をにらめっこして考えていたこともあります。今でもあの時の自分を思い出します。あの西田哲学には「絶対矛盾の自己同一」なんていう変な言葉があるでしょう。実はあの言葉に魅惑されちゃつて、あー、なるほどなあ。こういうことがあるんだな

あ。それから一生懸命にあの本ばかり読んでました。他の本を読んでいる暇はなかったものでした。その影響で、駒沢大學が終わりましてから、京都にまいることになったのです。

京都にまいりましたのは、西田さんの講義が聞きたかったためだったかも知れません。これが第一の私の脱線の道でした。それから今度は、鈴木大拙さんのものを一生懸命に読み始めて、絶対的神秘的体験を俺も一つしてやろうと思って一生懸命に、一人きり坐禅をしておりました。京都におりましたときは、ずっと鏡島先生と一緒にたんです、実際は、衛藤即応先生のお指図で私は京都の洛北の紫竹林学堂に入つたのです。その一年さきに来ていた彼を呼んでそれで二人が一緒にすーと三年間住むことになりました。紫竹林学堂それはよい環境でした。全く雑音が聞こえませんでしたから、こんなに坐禅に適したところはないと思いましたので、毎日部屋の中で、一人きり坐禅を、やっておりました。なんだか私には坐禅というものがついてまわっていました。その頃の私はなんといいますか坐秤に憑かれたようなものでした。どこへいっても、この坐というものが離れませんでした。これは宿命というもんでしようか。それで坐禅はしおつちゅうやつてました。面白いことがありました。坐禅のとき、一生懸命、坐つておりましても変なものです、こんなこともあるものです。静かなところということを満喫して坐禅していました。

て、大変結構だとは思いましたが、途端に枕時計のコチコチ、コチコチなっている音に気がついて、それが今度は邪魔になりましたので、その時計を、押入れの布団の下に入れてしまふのを味わっていました。もう音がしないなあ、そんなふうな気分にもなりました。それと同時に何処かに音はないかなといったような「音を搜している」ような気になってしましました。気がついたら外の方で松風の音がしているのです。そうしたらこれが今度は気になり出してしようがなくなってしまいました。これではだめだ、こんなときは坐禅ができないなと思い、その日はやめました。それから後に、今日は風も吹いていない、ひとつ今日は例によつて坐禅してやろうかと、一人きりまた部屋の中で坐禅しておりました。そのときに困ったことがまた一つ出てきました。音がない、音がないなと思って坐つておつても、なにどこかで音がしてないかなという気持ちになつて来るものです。実は自分が音をさがしているんです。この枕時計のカチカチはなくなつた。それから外の方の、松風の音はすっかりなくなつた。するとどつかに音はないかと捜しているような変な坐禅です。そのうちに手首の中で音していることに気付いて、それが聞え出しました。とうとうしまいにはね、心臓の音が聞えるよう

になつてしましました。あゝ、これはいけねえ。この音は生きてるあいだは仕方ない、消す方法はない。これだけは逃げ道はない。本当に静かつてことは、どういうことだろうか。ということで行き詰りました。それでは一体坐禅ということは一体どうしたことであろうかと、どうしたら、いいだろうか。それがずーっと悩みになつております。丁度その頃、京都大学では、久松真一という人が始めて講師として来られました。私はそれでこの久松真一さんの講義を聴きました。そしてこの人は大本山妙心寺の春光庵という寺におられましたから、よくお訪ねしました。それというのも、この人についたらば絶対矛盾の自己同一、即無的実存といった絶対的体験ということがどうした出来るかということが伺えるかと思ってお訪ねしていたのです。つまりどうしてもあの先生のように自分もひとつ坐禅をして、あの絶対的体験を得ようと思つておりました。あの時分の自分というものを回顧すると異常のようでした。

それから今度は、京都大学での生活を切上げて、大本山総持寺本山僧堂に掛塔することになりました。総持寺にまいりましたそのときの後堂が沢木興道老師でした。そしてその時の老師の話をはじめて聴きました。そうすると、全然これまでのとは、調子が違うんです。私が今まで聞いておった禅の性格と全然違うので、変だなあと思いました。そこでもう一つの困難にぶつかりました。そしてどうすることもできなくなつてしましました。どうしようかなあと考えました。私はその時は両大本山に掛塔したのは、本当の気持ちで行つたんじやなかつたのです。ただ教師資格もらうためだけだったんです。その当時は両本山に半年ずついけば一等教師の資格が貰えたからです。つまり坊さんとして生活して行くのはもうこれで十分だつたんです。

ところで、そのころの両本山での坐禅はただ日常の行事としてあるだけで雲水達も真剣にやっていない。これが、その当時の状態であつて、今はどうか知りません。その時分には、坐禅というものは、時間制度ですから、その時間が来ると仕方がいいから僧堂に入つて坐るだけのことです。ただ睡眠していると警策で打つだけです。その打たれるのは大体は新到者だけだったようでした。それとと言うのは新到のものが警策当番になると、古参の者には遠慮して新到のものだけを打つといった具合でした。だから新到に警策当番をやらせると古参のものは安心して寝ていたものです。これは総持寺の方ばかりではなく、永平寺の方でも同じでした。永平寺いきましてから、古参のものは新到が警策をもつて歩いてる時は、絶対安全というて安心して皆ながら居睡りしていたので、私は腹が立つて仕方がなくて片つ端から警策で打つて歩きました。そうしましたら、いまでも思い出しますけども、私が

旦過寮の時の客行やつてくれていた者がおりました。今、壱岐の方でお健在のようです。その人が、頭下げて（この人はこの客行の時に私達新到の者に対して厳しかったその復讐をされていると思ったのでしょう）『客行をやつておつた時に大変非度ことをしてすみませんでした。あれから監録になっているが。この監録という役は大変に、忙しくって、それに、開枕の時には寝られないし、朝も振鈴前に起きいなければならぬので、坐禅をしていましても眠くて仕方がないのです。だからお手柔かに勘弁して下さい』と頼まれました。それで私は「よしよし」と答えておいた。まあ、こんなところか僧堂での風景であつて真剣な修道はありませんでした。したがつてその時に私はこんなところにおつても仕方がない。こそそこでは本当の坐禅ができない。なんとかして、真剣に坐禅するところがないものか、とその時一生懸命に考えておりました。それから考えついたことは、仕方がない、いつそのこと臨済宗いくしかないと決心しました。さて臨済宗を言つても、一体どこへいったらよいか全くわかりません。それで今でもその時の手紙を残していますけども、久松真一さんにどの僧堂がよいか紹介して貰いたいという手紙を出しました。そうしたら丁寧な手紙を下さいました。

「臨済宗の坐禅を志されましたか、それは結構なことです。そうでしたらね、この京都には僧堂がいくつかあるけど

も、推薦出来る僧堂は一つもない。僧堂の条件は師家と、僧堂そのものの善し悪しに關係する。両方とも条件のかなつたところへ行くのがよいです。それで、まず一応、推薦出来るのは京都では建仁寺くらいなもので。建仁寺は道元禪師と関係があるから、京都へ来るならば、建仁寺にしたらよいです。京都以外と言うと鬼僧堂として有名な、久留米の梅林寺だと思います。久留米の梅林寺へわしは何回か人を推薦してやつたけども、つとまつたのは一人もいませんでした。みんな、あまり厳しいのでたいていのものは堪えられないので逃げ出してしまいました』。とこういう返事を貰いました。

それで私はどうせ行くのなら、最も厳しい鬼僧堂の方がいいと思いまして久留米の方に決めたのです。ちょうど、久留米の方に知り合いがあつて、その人の尽力によつて梅林寺僧堂に掛搭することが許されました。この僧堂はなかなか入れてくれないところですからその人の尽力がなかつたならば掛塔は出来ませんでしたでしょう。それは昭和十五年の十月でした。ところがこの梅林寺僧堂というところは、全く私の期待とは違つてました、つまり肝心な坐禅が余りないと言うよりは殆んど無いと言うようです。ここで憶えた言葉がこの僧堂のあり方をよく象徴していました。これはどういう言葉かと申しますと、「動中の工夫は静中の工夫に勝ること百千倍」、これがここに建て前だったのですね。あそこでは、必ず公案

もらうことになっていて、その公案を、朝から晩までいつも考えている。そのためにこんな美談がありました。托鉢していて、無の公案に夢中なつていて、溝の中落こちてしまつたものがあつたということです。それから、あの梅林寺の井戸で、その当時あの寺にはね、ポンプ使用は絶対に許されていないのでね、井戸から水を汲み上げるには車井戸でした。そこで井戸の大きな御影石の枠の上に跨つて、太い網を繰つて重い大きな釣瓶で水を汲み上げるのです。これはこれは大変危険な仕事です。それを公案考えながらやつとおつたために、井戸の中に落ちたものがありました。これらがこの僧堂での美談になつていきました。これらがこの僧堂がどういう風であつたかがよく象徴していました。

それから坐禅堂におきましても、坐中には、口宣というよりは、騒々しい罵声と警策の連打ばかり。本當に静かに坐禅することは全くなかつたです。つまりこれらは異常な雰囲気を作り出すためにつとめられていました。その最も代表的なのは臘八撰心でありました。正式の僧堂における坐禅は一日中夕方に一時間ぐらいなものでした。その坐禅も我々から言えば本当の坐禅はありませんでした。その坐禅中は引磬たたいて、戒尺を打つて一つの調子をとつているようでした。永平寺や総持寺でやつてある坐禅とは全く違つてます。そしてここでは本当の坐禅はできないことが分ります。

た。ここでは坐禅するは夜坐に限ると言われていました。夜坐というのは開枕後、みんながそれぞれの定まつた場所へ行きます。まず、例えば新到のものは便所の裏とか。それから旧新到、中单の者は本堂の前の縁とか高单は鐘楼とかといつたようにどこどこでとそれぞれ階級によつて場所が違つていました。それから、わしらは新到ですからいつも、便所の裏でみんなが集つてましたが、結局、坐禅はしません。いろんな雑談をして時間を費やすだけでした。それから、朝は、顔を洗面の時間がないんです、だから、朝、洗面の出来ないので、夜坐の時間が終つて就寝する前に、明日の朝の顔洗をしたものでした。まことに変な世界でした。然し面白かったです。朝は時間が来ると、禅堂の后門のところで法堂の係りのものが振鈴をします。一応係りのものは振鈴してから鐘楼に昇つて梵鐘を撞きます。撞き終るまでは僧堂のもの起きてはいけないので、鐘声をただ寝て聞いているだけです。撞き終つて、法堂の方で大鼓が鳴り始めると、高单さんが起きて洗面に行きます。それから階級順に起きます。順番に起きた途端に、法堂へ出発するのです、したがつて朝洗面は高单のもの以外にはその時間がありませんでした。高单の者達だけは悠々とね起をし、洗面をしていました。禅堂の中では私たちは寝間着の使用は許されていません、ただ直綴（法衣）を脱いだだけで、一枚の夜具を横に二つに折つてその中に入つて

そのまま就寝しています。したがって起床したら、すぐ夜具は畳んで頭の上の棚の上に片付けます。（函櫃はありません）そして大急ぎで法衣を着て搭袈裟をして、そのまま法堂に上殿します。したがって暁天坐禅はありません。法堂の朝課の読經中、順番に方丈での独参に行きます。

この間、NHKテレビで伊深の正眼寺僧堂生活の放映をしていました、あの通り実際やつて来ていましたからなつかしかったです。臘八接心会の時は、僧堂での坐禅中には独参の鐘の音がすると、堂中のもの全員が一齊に禅堂の前門からばかりでなく窓からも飛び出して、草履を足にはくひまがないので草履は手でつかんで、裸足で独参場に飛び込むんです。まあ言うならば、こんな調子で夢中でやつていました。

ちょうどそのときに曹洞宗から三人ほど、若い雲水が来ておりました。どこから来たかと聞きましらみんな金沢の大乗寺の渡辺玄宗さんのところにおつた人達でした。君達はここをどう思うかと聞きましたら、矢張りここへ来てよかったです。やはりこちらは公案の参究が本式だつたと感じていると言つていきました。そして彼等は宗門のことは全然知りませんでして、驚きました。で、それで仕方がないということで夜坐のときに私が宗門の話をしてやりました。先づ第一に毎晩「弁道話」の話をしてやりました。それから、彼等は始めて、宗門の坐禅というものがどういうものであるかに気がつ

いたようでした。

私はその頃、町へ出ることがあって、本屋の店頭に『大法輪』という雑誌が出ておりました。それはつまり昭和十五年の秋のことでした。その雑誌を一寸みましたところ、大中寺で天曉禪苑を開設して沢木興道和尚が接心をはじめたとありました。それで自分はここにおいても何にもならない、一日も早く天曉禪苑に行かなければと決心しました。そして翌年の三月に梅林寺を下山して栃木の大平山の麓の大中寺に行くことに決めました。そして大中寺に到着して、沢木和尚に相見した時に、和尚がこんなことを言いました。私にとってはこの言葉は生涯の印象となりました。『我が宗門は上は管長から、下は青小僧の端にいたるまで一人も悟つたものがいない。すばらしい宗旨だぞ』。変なことをいう和尚だとその時は思いましたね。その時、私はがっかりした。そのときにもう一言こういうことをいわれました。『せつかく、ここへ來たからなあ思つ存分にやりなさい』。思つ存分やりなさいとは、思つ存分坐禅しなさいということなんだなど受取つて、これは非常にうれしかつたです。それから、あの寺には檀家がありませんから人は誰もこないので、毎月必ず五日間接会を行いました。その接心会では全然横臥しない坐禅をしました。その間は山門に『門内に無用のもの入るべからず』といふ札立てやっていました。お寺で、門内に入るべからずなん

て、考えてみればおかしなもんです。最も人に来られると応待に出なければならないので、こうした札を出したのです。この大中寺はこんなことをしていても差し支えないような寺でした。お蔭で私は思う存分に坐禅に本当に親しむことができました。接心中は夜も横にならないので全員が禅板を使用しました。斯様にして純粹に坐禅中心の生活をしていました。

昭和十九年の秋、十月に、大東亜戦も窮屈になつて、東京の学童疎開がやつてきて、お寺を全部使用ということになつて、で、私たち禪苑の修行ができなくなりました。それで天曉禪苑を解散しました。それで仕方がないので、一先ず師寮寺に帰ることになりました師寮寺の南満州の大連市にある常安寺でした。それで一応、普通の寺院生活に入つてきました。

私のこれまでの期間というものは、坐禅へ目茶苦茶に突っ走つていた暴走族でありました。私がこのような暴走を思う存分して來たということはこの暴走をさせてくれたものがあつたからでした。それは、私の師匠でした。実はこの人も私と同じ型の暴走族だったんです。彼もどうしても一般的な宗門の坐禅にあきたらないで、どこまでも絶対的な体験をしようと思っていたのです。ところが彼は師匠、私には孫師匠にあたる方丈にひっぱられて、非常に忙しい常安寺に引き戻され、寺の住職させられてしまつたということだったのです。

そして毎日寺務に忙殺されてしまつていました。だから衲はこれまで思う存分のことが出来なかつたことを思うと、全くやりきれない気持だ、その代りにお前にだけは一生懸命にひとつこの道を進んでくれよと云われていました。今でもその時の懇切な手紙を大事に保存しております。師匠は生涯、禅宗僧でしながら自分は本当の禅の体験は全くなかったことを苦しんでいました。「お前だけは本当の体験をしてくれよ」と私はかくて囁きを担わされていました。「禅々と言つてはいるがこの宗門には殆んど禅の体験、絶対的体験をしたものはない人もいんだから。なあ」といつも嘆いていました。「わしの同級生にこんなのいた、関頑牛と言うのが、彼は臨濟宗に行きおつた。そして現在では宗門に帰つて来て師家になつてゐるが、しかしながら、あれでは駄目だよ」と、私の師匠は彼と軽蔑していました。どうして関頑牛師を軽蔑したかは私にはわかりませんでした。

そのころ師匠は毎朝必ず自分一人で、自室で、必ず坐禅をしておりました。かくて私は禅の道を要望されたのでした。それがあつたのですから私は私の禅道の暴走を許してとうよりは励ましてくれました。それでこの我儘者が思う存分に暴走をやることが出来たのでした。今から考えるとその当時の私というものはなりふりかまわずの暴走族でした。道場が、学童疎開の占拠によつて解散したために、しかたがない

師寮寺へ帰ることになりました。帰りまして半年たつた昭和二十年五月十三日に、応召して北満の牡丹社の部隊に入隊して、兵卒の訓練を受けていました。八月九日にロシア軍の突如の侵略があつてから、八月十五日の終戦まで北満の山中で防衛陣地の構築に必死の労働をしました。終戦以後は我々は全員が捕虜となりました。露軍は、捕虜を酷使して日本軍の貯蔵物資を全部シベリヤに運搬していました。

私が終戦をむかえて陣地構築の作業していたところは、鏡泊湖でした。鐘泊湖は、人跡未踏の原始林のまん中にある大きな湖でした。あのような大自然の素晴らしい景色は、このような事でもなかつたら、親しむことができませんでしたでしょう。その意味で私は今でも感謝しています。

私達が鏡泊湖へ到着したその時に露軍の侵攻が開始され、私達のそれまでおった牡丹江の兵営は、全部ロシア軍に攻略され、そして兵営に残っていた人達は戦死したり、負傷したり大変なことだったらしいということでした。それに対しても私達は鏡泊湖の方へ事実上避難して来ていたようなものでした。

終戦から私は開放されるまで捕虜生活をしていました。捕虜生活中でも私にはいつでも私の暴走族が頭について離れませんでした。やっぱり。もう、生理的になつてしまっていたのでしょう。いまさら方向転換できませんことを身にしみて

感じていました。私は召集されて、配属された部隊の中の将校の一人がどうしたことか私を特別に世話をしてくれました。それはどうしてか知りません。その人は私の属していた小隊長でした。時々私をわざわざ自分のところへ呼んでくれました。呼ばれたので行きましたらお前は一寸皆なと變つてゐた。私がどういうことかわかりませんでした。「お茶のみながらいろんな話をしようじゃないか」といふことで色々な雑談をしました。

私は応召してまいりました時に、全々「お守り」を持っていませんでした、大抵の召集されて来た人達は殆んど皆な沢山の「お守り」を体につけていました。入隊する時には一人一人が入念に身体検査をされるのです。その時に私だけが「お守り」を持つていませんでした。すると検査官に「お守りがなくとも大丈夫か」と聞かれましたが、私はそれまで全く「お守り」などは所持したこともなかつたし、そのようなことを考えたこともなかつたのです。だから「そんなものはいりません」と答えました。

私はその時、いつもと同じような顔していたようです。それで、その将校に見込まれたのかも知れません。いつも呼ばれているうちに、何時の間にか、その度毎に『証道歌』の話をすることになつてしましました。

昨年秋ごろ私が泉岳寺にまいったおりましたら、全々知ら

ないものか、面会に来ました。それが実は全く忘れてしまつていていたそのときの少隊長でした。久しぶりで会いました。

終戦から翌年の四月十五日まで捕虜生活をしておりましたが、解放されて大連市の師寮寺へ帰えることができました。

昭和二十二年の二月には師寮寺の全員は一般市民の全員総引揚げによって着のみ着のままで引揚げてしまいました。然し私は寺にこれまでのもの全部をそのままにして引揚げる（仏教大辞典、正法眼藏（木版本）曹洞宗全書等々）気持になれないでの、一人だけ居残ることに決めてしました。（一人ですから生活のことなど全々考えてはいなかつた）

翌二十三年には全部（本尊觀世音や菩薩像まで）も持つて引揚げることが出来ました。引き揚げて舞鶴に上陸しました。その時の私はこれからどうしようなど考えてはいませんでした。その時、ちょうどその時に横浜の永久岳水という人から手紙が届いていました、この永久岳水という人に、私の師匠の親友でした。この人が、ちょうど今度、長崎の皓台寺に住職することになつて普住しなければならないが、現住の自坊の後任者がなくて困惑している時に、私が引揚げて来るということを知つてたので、すぐそのままこちらの方へ引き揚げて来てくれということでした。そういうことで、兎に角、横浜に落着くことにしました。横浜は東京に近いもんですから何は兎に角、その後、どうされたか心にかかつてていた沢木老師

を訪ねることが出来ました。そのときに老師は六十八歳でしたが、その間に病氣されたり怪我されたりで体が非常に衰弱されて、すっかり七十以上の老人の姿になつておられたので驚きました。それでも駒沢大学にはつとめておられました。それが縁で二十四年四月から私は沢木老師の助手をすることになり講師として駒沢大学で勤めることになりました。実はそれまで老師の助手をしておつた人が突然、脳溢血で迂化して、その後任者がないので困つておられる時に私が横浜におりましたので、丁度その後任によからうということで決められたらしいです。全然考えたこともなかつたことでこの事は私には全く寝耳に水でした。そのときは、老師から話があつたのでなく「駒沢へ来ないか」という、衛藤即応先生から手紙を頂いて決心した次第でした。

このようになつてしまつたということは私のそれまで暴走業の果報でそのようになつたのでした。つまり私のこれまでの一途の暴走の因果の報いが今度の縁を作つたというわけで、したがつて私はそれに従わなければならなかつたのでした。それでこの駒沢大学のその後の三十八年間というものが始まつたのでした。このおかげで、私は自分の一生の暴走を全うさせていただくことが出来て、非常にありがたく自分の果報者であつたことに対して感謝しています。まあ私の人生はこれでもつてすべてが終わります。この度駒沢大学で

の勤めを終らせ頂いたということは、駒沢大学によつて私の人生は全く順調に完了させて頂いたことになります。この三十八年間、駒沢大学で過ごさせていただいたいということは、非常にまあなによりの有難いことだつたと思って感謝しております。それで今日、この御礼をいうようにということで、ここでお話をさせて頂くことになつたのではなかつたでしょうか。そうして、こうして図々しくとうとうここに上がつてまいりました。兎に角、みなさんに厚く御礼を申し上げる次第でございます。

まず、言うならばこれ一途に私に禪の道をたどらせて頂くことができたのは、駒沢大学で勤めさせて頂けたからです。もしもそのようではなく普通の寺院生活に終始してしまつていならば、暮らしむきとかそんなことしか考えなきやなりませんでした。それを、駒沢大学に入れて下さったおかげで、もういつへん過去の勉強のしなおしをすることが出来ました。これが有難い一番大事なことでした、その時に大学時代の仏教の勉強は本当に身がついていないこと痛感いたしました。やっぱり、大学時代というものは、ただ今後の勉強する方角を教えてもらつただけで、実際いいますと。駒沢大学に勤めるようになつて、更に竹友寮生活していましたから専心純一に、全く生活のこと考えることなく努力することが出来ました。あの時代の私は全くよそ見せず何はとにかくまず基

礎学を一生懸命に努力し、徹底的にやることができました。それに一番、有難かつたことは原本を一生懸命読むことが出来ました。私は、みな若い人たち、特に宗学の人達に特にお勧めしたいことは、どうか基礎学をしっかりと身につけて貰いたいことです。禪をやろうと思うなら先づ第一に基礎学を徹底的に勉強しておいてもらいたい。私はもともと、どういう出身かといいますと、唯識やつておりました。京都時代は、専一に『攝大乘論』を中心にずっとやつておりました。それでそういう関係からかも知りませんけれども、とにかく教学の方向に一生懸命に徹底的にやつておりました。だから私は昭和二十五年の夏から毎年八月の一日から十日間、名古屋の、妙元寺で講習会をやつております。(現在も続けています。本年で三十七回になります)。その講習会では徹底的に、その教学ばかりやつて来ました。一番はじめに、多分大乗起信編それから、『三論玄義』だったと思ひます。それから『中論』、『仮性論』『攝大乘論』そのようなものを徹底的にやつておりました。そうして、『維摩經』しまいにはね、『法華經八卷』、それから『涅槃經』を最後にやりそれから現在は宗学をやつています。兎に角そういうふうにして私はいつも基礎学を徹底的にやつておりました。ということは、基礎というものができませんことにはね、宗乘を本当に深く頂くができませんからです。だからして、これからの方たちにも特に基礎

学の教養には生涯を通じて一生懸命努力していただきたい。

宗学の専門に走つてばかりおりますと自己流になり視野が偏狭します。また自己陶酔の宗学になります。それで私は沢本老僧からいつもこれについて教示を頂いていました。

あの沢木興道という人は大和の法隆寺で佐伯定胤僧正について法相の唯識学を本格的に、徹底的に勉強されました。それで法隆寺の唯識の本流の伝統的な書入れが全てまとまつて、老師の手によつて仕上げられたものが全部図書館に寄附されています。法隆寺伝灯の唯識にとつては貴重な文献であると同時に駒沢図書館とっても貴重な文献であります。この法隆寺の唯識学は現在の唯識学をやつてる人達とは方角が違いますけども貴いものと思います。あの書入本は如何に若き日の老師が教学に一生懸命に努力されていたか、その結晶だったのです。それで教学の非常な苦労が沢木和尚の坐禅行を産み出す素地ともなつたのです。

老師は宗門に帰つてられてからは宗学に専念されることになつた。それから老師が宗門に帰つてから痛感したことは『正法眼藏』の大家といわれる人たちの、教学にあまりにも無知であったということだつたそうです。つまり彼等は仏法の根本がわかつていないので、自分勝手な考え方でやつてゐるので、おかしなもんだつたといっておられました。仏教教学の素養を身につけていたために自己流の理解で押し通つ

て、それで自己満足を作り上げていたので彼等には『正法眼藏』の本当の理解が出来ていないとということを、余りにもはつきりと見せつけられてガッカリしたようでした。これが所謂る眼蔵家と言われていた人達の実態であつたのです。最もの人達というのは、實に沢木老僧とは同門下だつたので実態を実感しておられたのです。沢木老僧は、法隆寺の修学を一区切にしてからは丘宗潭という人に隨身していました。この丘宗潭という人は西有潭山禪師から最も信頼された西有門下の最長老だつたのです。西有禪師という方はその当時の第一者でしたから当然のこととして永平寺の第一回の眼蔵会の講師を依頼されました。年齢と健康上からの理由で辞退されで門下の最長老の丘宗潭老師を推挙されたのです。それで、丘宗潭老師は第一回の眼蔵会の講師を勤められました。そのように西有門下の最長老であつたという丘宗潭老師の下に参するようになられました。

その西有門下には、漢学を一生懸命にやつてから、門下に入門したお弟子方がおりました。その人が西有禪師の下で、眼蔵の参究を始めました時に、同門下の先輩でかつて漢学を専攻した人のところへいこうと申出た時に、西有禪師から「決しておまえはそんなところへいっちゃいけない。おまえには変な癖（漢学）がある。そのおまえがあんなところへ行つたら、同じ病人と病人が一緒になるから大変なことにな

る。だから行くな」と言われて、その人は丘宗潭さんのところへ行くように指示されたという話があります。その人は遂に『正法眼蔵』においては、宗門においては第一人者になりました。ところがそのような方ではあったのですが教学に対する対しては、全く無知に近いものだったということでした。沢木老僧はこのことを指摘していました。「あの人は教学がないので、全々わからないことにブチあたると、わしんとこくへ、よく問い合わせをよこしたもので、それは助言をしたが、それも本当によく理解してくれなかつた。全く困つたものだつた。」ということを言わ祝いていました。「どうかこの『正法眼蔵』を勉強するときには、教学の基礎をしつかりと身につけておいてくれよ」ということをしょっちゅう私は聞かされておりました。それで私もこの学校に就任してからずーと、この基礎学に骨を折つておりました。どうか、研究発表も結構ですが、この頃は研究発表しないと業績が上がらない上がらないといつて、研究発表ばかりやつてますと、結局、研究発表に終始して、学問が特に仏教では身につかないで変なもになつてしまわなかつと、私づくづく心配になつて来ています。研究発表する為には一つの問題を設けます。その問題の究明のために一生懸命にやつてますね。だが、それでは肝心な仏教は「自己」の究明ですが、この地道の参究ができません。それにはどうしても教学を深く深くやるということがあ

なければなりません。そのような勉強では業績は上らないし研究成果が認められないでしょう。尤も認められないと一般的には採用されませんが、とに角、基礎を一生懸命に固めていただきたいものです、これは学道者として生涯通じて努力していかなければならないことです。

とにかく宗学者というものは基礎を究めてもらいたい。その上で、宗学の方へ徹底的に入つていただきたい。私は感心したのはね、衛藤先生です。衛藤先生は教学者ではあります。言うならば徹底した教学者でしたが、この徹底的教學がそのままに、宗学に入つて行かれました。宗学に入れましておいてくれよ」ということをしょっちゅう私は聞かされておりました。それで私もこの学校に就任してからずーと、こゝの基礎学に骨を折つておりました。どうか、研究発表も結構ですが、この頃は研究発表しないと業績が上がらない上がらないといつて、研究発表ばかりやつてますと、結局、研究発表に終始して、学問が特に仏教では身につかないで変なもになつてしまわなかつと、私づくづく心配になつて来ています。研究発表する為には一つの問題を設けます。その問題の究明のために一生懸命にやつてますね。だが、それでは肝心な仏教は「自己」の究明ですが、この地道の参究ができません。それにはどうしても教学を深く深くやるということがあ

れました。そこで、衛藤先生は沢木興道老師に非常に親しんでおられ、よく御宅の方に招待されていました。その度ごとに私は老師に伴僧していました。そのときには、衛藤先生がよくこんなことを言されました。「おい、酒井君、今日の和尚との話は秘密にしててくれよ、よそへいっていってくれるなよ」ということでした。そうしてそのときに忌憚なく、自分の意見を述べておられました。そうして老師にいちいち念押しをして確めら

れておられました。その時は先生は全く何の憚りもなく、忌憚なく宗乗においての自分理解を、そのまま赤裸に告白して念押をして確めておられました。それで私は側で聞いておつて、学道者というものは自分の理解だけで満足して止まつてしまつてはならない、その謙虚な眞の学道者の真面目を見せて頂くことが出来たことは、私の一生の中で最も貴重なことでした。本当にありがたいことでした。

今後の宗学の参究には基礎というものをしっかりと身につけておいていただきたいのです。これは私自身の実感であります。これがありませんと『正法眼蔵』の眞実を本当に参究していただくことはできません。これは歴史的な研究や、書誌学の方面の研究も非常に重要です。その中でも書誌学の研究が大変に発展したということは私たちにとって、大変うれしいことでした。ところが書誌学ばかりやっておりますと、肝心な『正法眼蔵』そのものの参究に入り切れなくなってしまいます。『正法眼蔵』の教理の研究と書誌学が全く干係ないというものではなく、却つてこの方面への配慮を決して欠かしてはなりません。したがつて書誌学の研究はどうしてもなきやならないものです。ところが、根本はといいますと教理ですから、その教理を徹底的に究めておいていただきたいと思います。

私たちの宗門は「只管打坐」の宗旨です。あの「只管打

坐」の宗旨ははじめは全然私にはわかりませんでした。そして、兎に角、禪は絶対的な体験をしなければいけないとつてそれに夢中になつていきました、これが私のいう暴走族だったのです。ひとつの目的のために手段を選ばずにやつてしまつたのです。暴走とは、まことに勝手なことに夢中になることだつたのです。この暴走をここで申しますのは、これは他ならぬこの私の自己反省なのです。駒沢大学に就任いたしました。でもこの私の心の底辺には、いつもこの暴走がうごめいていました。なんとかしてといつも思つていきました。それで特に昭和二十四年の四月に駒沢大学に就任してからも寮でも自分一人で心やりました。そのうちに若い連中のある者達も私と一緒に接心することになりました。ある時は徹夜でやつて相手を困らせたこともあります。自分の方は何時もそれやっていましたから。三日半ぐらいの坐りはなんともなかつたでした。

はじめの人は大変だつたらしいです。それで、途中でへこたれたものもいました。とにかく「行」というものが、一番大切なものだと思って、しょっちゅう「行」、「行」ということがいつも頭について離れませんでした。ところが、年をとつてまいりましてこんな生活ばかりしておりますと遂に昔の沢木老僧のいつおられ言葉が身にしみるようになりますた、これというのも年齢というものでしよう。

私にとって非常にうれしかったのは、その昔、夢中になつ

ていた西田幾多郎さんの「絶対矛盾の自己同一」とか、鈴木大拙さんの「絶対的神秘的体験」、それから久松真一さん、「即無的実存」とかいうようなものは、单なる昔の物語りに過ぎないようになると、嘗つて感激は消えてしまいました。私たちの「只管打坐」の坐禅が将来においては、これだけしか残こらんのじやないかと感じています。これはと申しますのは、絶対的体験といったところが、それは人生上のその時だけの異常状態であつたまでのことと絶対的な体験でもありません。大体が絶対ということが体験である筈はありません。たままでのことと絶対的な体験でもありません。それは絶対的な体験というのは一種の興奮に過ぎなかつたのです。このことがよくわかりました。それでは何が一番大切なことでしょうか。「平常心是道」ということだつたのです。つまりそれは何の変哲もない無感覚はあたりまえの日常事だつたのです。これが本当の自分というものであつたのです。そしてこれが一番大事なことだつたのです。そこではということもあつてはならない、即ちいつもこれであつて、したがつて異常感などが全くあり得ない、これが絶対無量無辺の眞実であり、平常心是道だつたのです。したがつて、すばらしい状態だ、これこそ最高のものだというようなものは絶対といつ

たものではなかつたのです。

『正法眼蔵』の中に「諸法実相」の巻があります。この「諸法実相」は、これ『法華經』の中心であります。諸法実相ということはあらゆるものごとは全て眞実の姿であるということであります。したがつてそこには選り好みすることはありません。したがつて我々は全てそのままいただかなきやならないということです。人間というものは、自分には都合のいいもの、自分の好きなものをいたくことばかりやっています。そして自分の都合のいいことや、自分の好みにあつたことに会いますと喜び、自分の嫌なものには、不愉快を感じ、更には憎しみをも感ずるものです。ところが實際には好きなものばかり、都合のよいものばかりとは参りません。

実相とあるからには、全てが眞実の姿であり、眞実そのものであるならば、好きなものも、都合のよいものも、またその反対のもの眞実であつたのです。したがつて仏道修道は眞実の修証である以上、一切、そこには自分好みというものを持込んではいけないということになります。即ち一切自分といふものを持込まないということであつて、それには一体どうするというのでしようか。即ち日常生活を全部一切返上するより外はありません、そこに坐禅があつたのです。即ちそれが只管打坐の坐禅だつたのです。つまり只管打坐は日常の自分を本来の自己に返上して、本当の自己を実修実証するこ

とであつたのです。そこに始めて純一の仏道が実修実証されるのです。絶対的神秘的体験を求めていた私は、そのようなことを止めて、この坐禅に入りました。そしてあー、よかつた、特別の体験などを求めることが全くなつた、今の自分を悦んでおります。今、こんなふうになつていなかつたら今ごろ自分はどうなつてゐるだらうかと思うと、ゾッとなります。そして特別の体験をしたと言つてゐる人達のことがよくわかります。と同時に人間というものがどんなものであつたかということがよくわかりました。

絶対的体験をしたと称する人達がよく自殺したとか言うことを聞きます。するとあの絶対的体験ということは、その人の本当のものではなかつたのです。つまり彼等に本当の自己、自己の真実には全くかかわりの無い、感覚的なもの以上ではなかつたのです。結局、私に教えてくれたのは、彼等の目指して粉骨碎身した絶対的神秘的というものは、彼の自分達が勝手に希つたもので、つまり彼等は自分の欲望満足追求の暴走族だったのです。

人間は一生懸命に修行するというときには、必ず目指す絶対的なものを自分で決めています。そしてその絶対的なものに向つて一生懸命に努力するのです。これが普通の修行といふのです。したがつて修行者の中には自分の体はどうなつてもいい、断食しようなどだらうとかまわん、無理してや

っています、だから私はこんなのが自己満足の暴走族というのです。こういうようなことは、人間以外にはないでしょう。自分の理想に向つて修行するということはありません。こんなことは人間だけのことです。断食してみたり、それから苦行してみたり、こういふことは、人間だけです、これがいつも、理想をもつていて、それに向つて努力しています。この理想に向つて努力するということは人間に生れた宿命というものです。つまりこういう生き方は人間の生理現象といつたらよいでしょう。生理現象だからそのまま無条件に人間はそれに暴走します。私にこれが暴走であることを教えてくれたのは仏道でした。仏道には、理想主義ということはありません。理想にむかつて一生懸命にやるということはありません。それが無所得・無所悟であり仏法の原則です。これは、つまり仏法の原則は、理想をもつなということです。だが私は、はじめは人間の生理現象によつて理想をもつてやつておりました。

もエゴイズムなものなのです。理想を純粹のものと考えてやっていますが、その純粹もわがままなんです。だから一生懸命、体なんかどうでもいいというように、飲まず食わずでもあります。それが世の中でよく言われている「働き蜂」だつたのです。一生懸命働いて、無理してまでやっています。だから彼等には理想が全てであつたので、それが駄目であつたあつたら、人生はいらないということになり自殺行為にまで走ってしまいます。つまり彼等には自分の体なんてどうでもいいということになつてしまふのです。目的のためには手段を選ばずといつたことも人間には珍しいことではありません。

かくて佛道修行というものが、どういうものでなければならぬかということをはじめて知らせてもらいました。これは、自分でもやってきました、その時は、自分の体・どうなつてもいいんだ。絶対的体験を得るために手段を選ばん、こういうことをやつてきました。もつとも、そう信じておりました。そう信じておりましたから、このようなことになりました。そう信じておられましたから、このようなことになんとも思ひませんでした。然し、年とつて今まで自分のやつて來た実態は、わがままの暴走だなあということに気が付きました。ははあ、わがままの暴走なるがゆえに、たとえ、どのように目的を達しても、それは真実ではなくて満足したまることであることがわかりました。私はよくこの頃、白隱さんの悪口をよく言いますが、私は昔、白隱さんの法語にぞ

つこんほれこんでしまつて夢中になつていきました。法語、特に『遠羅天釜』などは一生懸命読んだものです。

その当時は夢中になつて、ただ感心ばかりしていました。それを批判することなどは全然出来なかつたのです。これはあーいうんものではないですか、第三者的な立場にたつて、それを批判することなどは全然出来なかつたのです。これは、年とつてまいりまして、はじめて「ハハアー」、これは自分の暴走とそつくりだつたなあ、彼もやっぱり暴走族なんだな。一生涯、暴走で終わつたな。かわいそうな人だつたなあ、今度は氣の毒に思うようになりました、はあはあ、これでは仏法にならないじやないと感ずるようになりました。そして見ていたでしようか、たいていは、今までの私のように禅というものは、絶対的体験をめざして一生懸命やるものであると見ていているようです。私自身も一般的な禅の見方で絶対的な体験をしようと思つてやつてきましたので、体験をしたという人に對しては、絶対的な尊敬をしておりました。それからだんだんやつていて、「ハハアーよかつたなあ」あんなことやつていたら飛んでもないことになつてしまふところでした。これで世の中の人たちが、本当に自分というものに、生命活動というものの本当のものに、気がついてもらいたいものです。つまり、絶対的体験を目指してやつておりますのも、また絶対的体験をしたと感ずるのも、実は生命活動の一

つの表情にすぎないということに気付くことです。人間がどうなことに遭遇したとしても、どれもこれも生命活動の表情にすぎなかつたのです。そういうことに気がついてもらいましたならばと思うのです。そこでそういうような坐禅というものは、将来なくなるんじゃないかと思うのです。そしてそのようなことは、絶対的でも神秘的でもない、異常状態に過ぎないので、こんなことを本気でやるものもやがてなくなるんじやないか、と私は思います。それで、私は将来の仏道というものは、私たち道元禪師の『正法眼藏』の道しかあり得ないのではないかと、つくづく感じさせられます。私は、ここで一番うれしく思つているのは、駒沢大学にまいりまして、そういうようなことばかりさせられて頂くことが出来たからです。これは、普通だつたら、お寺に帰つておりますし、お寺の經營ばかり考えておつて坐禅はしませんでしょう。またする暇もありません。それで専一にこの道に、進むことができたということは、この駒沢大学のお蔭だったのです。

私は駒沢大学就任して三年後、昭和二十七年にその時の総長岡田宜法先生から、この竹友寮を頼まれました。その時、竹友寮の私の部屋にまでわざわざやって来られて、丁寧に頭下げて頼まれました。「もう寮がだめになっちゃっている。どうにも仕様がないから、お前さんひとつやつてくれないか」

といふことでした。その当時は世の中も敗戦のあとで日暮苦茶でした。したがつて竹友寮も例外ではありませんでした。まともな格好したもの一人もいませんでした。殆んどが復員してきたものでした。したがつて軍服を着ているものがたくさんいました。それから、この食料品がないものですから、みんな、郷里からお米を持ってきて、寮の食堂の食事では足りないので、殆どのが半分は自炊で補つていました。その自炊ですが、木炭も電気もガスもあるわけがない、燃料にするものが無いので教室の木造の腰掛や机を壊しては燃していました。

寮の付近は、現在の8号館辺ですが、あの辺は全部畑になつていました。それを食堂の経営者の木村鉄五郎さんが、その当時は野菜など仲々入手が出来ないので、その畑で「さつまいも」や大根などの野菜を栽培して、それを材料に調理していました。全く大変だつたでしょう。したがつて寮の食事半分は自給自足の状態でした。その作物の肥料は全部これも、自給自足でした。その時、耕作と肥担ぎを実際やつていたのは木村さんと若い今野さんと、関さんとでした。今でも関さんは健在のようですか。今野さんは亡くなりました。この三人が一生懸命に働いていた、あの時の姿が脳裏にはつきりと印象しています。

ところで一方、竹友寮内では一般社会の流れに迎合してと

言つたらよいでしょう「信教は自由なり」ということが流行つてきました。それで寮生は「信教は自由なり」で寮の規矩なんかに従うことはないというので。本来、竹友寮の寮生活は行学一如の規矩によるものであったのですが、それを怠けて勝手気儘をしてようとして寮生達が言い出した論理がこの「信教的自由なり」であったので、それは筋も何にもあつたものではありません。これには出鱈目滅茶苦茶というもので、これが当時の寮の状態だったのです。したがつてその当時は寮の行持は殆んど行われていませんでした。

岡田先生の依頼を私は引き受けて、これは一応大変だとは思いましたが、その時分の私にはこういう体験がありました。それで曹洞宗というところは、どういう宗旨であるのかということを知らせて貰いました。それと言うのは、こういう二回の体験であります。それは、私の、孫師匠が鳥羽の常安寺で昭和十二年十二月廿五日なくなりました。ちょうどその時、私は京都におりましたが、すぐ鳥羽に出かけました。そのときに弟子達が全員集まり、そうしてお通夜と、葬式とをやりました。そのときに、一番長老の者がこんなこといいました。「明朝は、何時振鈴、曉天は何時、それから引続き朝課」と一同に告報しました。これでは僧堂でと全く同じことです。これは。変なことだと思いました。その時はじめて気がつきました。実はこれです。坊さんたちが集まつたとき

には、かならずそこに、一つの僧団が成立したのです。僧団の成立には、必ずそこに修行というものの成立つ。それが僧団というものであるということを教えてもらいました。

われわれ坊さんが集まつたときには、ただ人間集まつたのであってはならない、集まつたところにおいては、必ず、そこには何時振鈴、曉天、朝課という行持が出現するのです。これが僧というものであることを知らされました。それから修禪寺の丘球学老師が亡くなられた時に、実は丘球学老師は私の法幢師でしたから葬式に参りました。そうしたら、老師に参考したその昔の雲水達が殆んど全員が集まつていました。そして、翌朝には矢張り、常安寺でと同じで「明日は振鈴何時、曉天何時、朝課何時」と告報がありました。ははあ成程な、これが本当の有り方なのだなあということが身にしみました。それで、私は以上で、坊さんが集まつたときには、このようでなければならないということ、それが仏法僧の僧宝であり、これが本当の原則だということを教えて頂いておりました。それで私は、竹友寮の寮生に対して諸君は宗門の徒弟であり、宗門人であるから、世間的な「信教の自由」であつてはならない。したがつてここに集まつているかぎりは宗門の家風にしたがうのが当然であり、それが宗門の子弟であるということだ、この竹友寮にあっては、当然のこととして「信教の自由」などあつてはならない。このような共同生活

は僧宝であつて、それには必ず規矩がなければならない。だから、明朝からは行事は固く始めると宣言しました。

それまでは朝課だけだったのでしたが、暁天坐禅も開始しました。その当時は現在のよう、竹友寮には僧堂がありませんでした。昔の講堂（昭和十二年落成百年祭に改築）下に仮の坐禅堂がありましたので、竹友寮からは、毎日走つて行かなければならなかつたのです。その当時は私は坐禅のほうを担当していました。その当時寮生は百六十名ぐらいまして、全部が入りきれないで半分ずつ坐禅組と朝課組とにして交替でやつていました。朝課をつとめる本堂と言つても、竹友寮の二階にあつた仮講堂だつたのです。そこに現在のような立派な本尊さんはありませんでした。このような状態の中で竹友寮の全員に行事を強制しておりました。そのころの私は毎朝ね、片端から各部屋を見て廻り起こして歩きました。中には振鈴など一向にかまわないので平氣で寝ているものもありました。その時は私は布団を引き剥して、叱り飛したものです。中には裸で寝ていて、その裸のままを寝台から引きずり降されたものもいました。

昭和三十年前後の卒業生で竹友寮におつたものの大部、このような被害者だったではないでしょうか。かくてこの竹友寮では学生寮の限度で僧堂生活をやりました。然も昭和四十一年に現在の新竹友寮になつてからは、僧堂も法堂も完備

しましたので、学寮限度の僧堂生活を徹底することが出来ました。その代表的なものは、毎朝行われている僧堂での本行鉢であります。面白いことに、永平寺いきましたら、実は本山というところでは非常に忙くて時間が無いために毎日毎時に本行鉢は出来ないので、毎日、僧堂では略行鉢が行われています。

したがつて時たま本山あたりで、本行鉢をやる時に、それが突然であつたりすると、作法の熟練者が不足していたりする。そのような時に竹友寮の出身者が呼ばれたということを聞いたことがあります。その時、私はやっぱり竹友寮でやつておつてよかったですと感じました。

私は竹友寮というものに対して常に信念をもつてしていました。それは僧堂生活を実践することです、なぜかといいますと宗門の生命は行持にあるからです。したがつて大学では行学一如でなければならなかつたのですし、またこれが建学の精神でもあつた筈です。そこで当然のこととして竹友寮においては行持なければならないのです。行持がないならば駒沢大学竹友寮ではなくなります。それで私は一生懸命、まあ竹友寮のためにやつたのです、然しそればかりではない、竹友寮というところでやつていることは実は私自身が行持することでもあつたのです。私自身は生涯を修道生活に打ちみたかったというよりはその修道生活が理想だつたのです。だか

ら実際においてこの自分のこの暴走を竹友寮生活が実現させて下さっていたのです。したがってこういうような寮に縁があつたということは、私にとっては、無上の好因縁であつたのです。

だから、私は特にこの駒沢大学の三十八年間の生活というものは本当に有難いことでした、なんと御礼をいっていいかわかりません。つまり暴走族の私に思う存分に暴走させて頂いたことはどんなに感謝しても感謝し切れるものではあります。どうも、みなさんがた長い間、つまらぬ話ばかりしました。まことに恐縮の至りであります。心から御礼を申し上げている次第でございます。どうか、駒沢大学は行学一如の学風であります、またこれが駒沢大学の建学の根本義であります。つまりこの根本義が実は宗門の生命であったのです。この宗門の生命のことを考えてみる時に、色々のことが考えさせられますが駒沢大学の存在は宗門の生命でありますので今後の繁栄と祈念いたしております。